

『年長児童の居場所』



# ヨルのジドドウカン

Ⅱ(児童館+青年ボランティア団体+中高生)×出会い

社会福祉法人 京都福祉サービス協会

塔南の園児童館 館長

中川 左知

児童厚生員

池田 英郎

## 1. ヨルのジドドウカン?

「こんばんはー!」5:30をすぎると、いろいろな人が児童館にやってくる。おとなしい中学生の女の子のグループ、短いスカートの制服にルーズソックスの高校生、茶髪にピアスの高校生やフリーター、学校に行っている人、行っていない人……。とにかく、いろんな若者が児童館に集まっている。

ある部屋では、5、6人の中学生がプレステ2のゲームで盛り上がり、ゲーム機をつなぎ、スクリーンの大画面に映しているのがゲームセンターに負けない迫力だ。その中学生に混じって、大学生ぐらいの人も一緒に遊んでおり、その横でお菓子を食べながら見守っている人も。台所では中学生、高校生の女の子達が、4、5人集まってワイワイ歓声を上げるがらのチーズケーキ作り。みんな

で作る事が楽しくらしくみんないい表情だ。その横の部屋では、10人ぐらいの集団が編み物に夢中になっている。その集団の中には、男の子も何人か混ざっており、見かけは「いかにも今ドキ」な少年が女の子に教えてもらいながら、マフラーを編んでいる。なんだか、変な光景のようだが、「おかんにマフラーをプレゼントするねん」と、本人は真剣そのもの。

他にも、マンガに読みふけている人、事務室で職員をつかまえて恋愛相談をしている高校生など、それぞれが思い思いの事をして過ごしている。

## ● つ♡き♡あ♡い♡た♡い

10月から中高生の居場所づくりの研究事業として実施している「ヨルのジドドウカン」事業の1場面である。大型の児童館や、中高生向けに建てられた施設でなく、なんの変哲もない普通の児童館ではあるが、10月から月に一回こんな感じでイベントを開催し始めた。

一緒にゲームをしている大学生ぐらいの青年、編み物を教えながら楽しそうにおしゃべりしているお姉さん、それを見守っている人、みんなの紅茶を入れている人など、すべてこの事業のスタッフなのだ。ぱっと見た感じでは、誰が参加者で誰がスタッフなのか解らないぐらいであり、スタッフは米館した12人の中高生に対し、スタッフは11人もいるのである。しかも、スタッフは大学生を中心とした青年男女で平均年齢は20才ぐらいと若く、中高生と付き合やすはずである。

彼らスタッフは、ただのボランティアではない。そこがこの事業の「ミソ」なのだ。彼らは青年ボランティア団体「ふらっと」のメンバーで、この事業は、「ふらっと」と児童館の連携事業なのである。

## 2. 居場所作りのそれまで

塔南の園児童館は、京都市南区の東寺南門通りを、上条手前まで下がったところにある。平成8(1997)年12月に開設した、まだまだひよっこ

▲なぜかブームになった、あみもの。おちついた雰囲気



の児童館。特色は、高齢者の利用・生活施設であるデイサービス・特別養護老人ホームと在宅支援の為にヘルパー派遣事務所との複合施設のなかに在ることである。少子高齢化社会の中で、子どもの自立支援と子育て家庭支援を地域社会の再生活動に繋げる児童健全育成活動を通して実現しているという事業理念のもとにスタートをする。

年長児童に対するこれまでの取り組みは、①学校のクラブ活動と両立させながら年少者や異世代と共に活動し多様な人格との出会いの機会を設定し、児童健全育成リーダーを育てる②児童館を通して地域社会に働きかける活動への参加を促進するという視点とスタンスのもとに行った。実際、中学生達の欲求に基づいた「クッキング」「ギター教室」と共に、児童館年中行事のメインイベント『夏祭り』や地域交流家族参加行事「遊びの広場」、児童館開設記念『子ども祭り』などへの呼びかけに対し、頼もしい協力を得ることはできた。模擬店のスマートフォン台作りやステンシルコーナー準備を進めていると集まってくる小学生達に、金槌や鋸の使い方を教えたり手伝わせたり。イベントに参加する幼児には背丈に合わせてしゃがみ込みながら手取り足取り伝える姿、小学生や年下の中学生のお手伝いをうまく生かす姿など、普段なかなか見ることのない優しい思いやりのある彼らの動きに感動させられる場面も数多くあった。

### ●もっく、ほんとは…

開設4年目を迎える児童館における年長児童の活動は、常に児童館が行事を立案計画し呼びかけ、

時間をやりくりしながら中学生がこれに比べるというスタイルから発展することはなかった。中学生が思いつき、考え、選り、決め、実現し、結果を肌身で感じるといふ体験ができる場、高校生になっても心地よく他者と出合え、自己実現できる場づくりは、5時までの事業の中で充分なのだろうかという問いが生まれ始めた。更に開設以来の関わりを持つ年長児童に不登校の傾向がある子や同年齢の友人をつくり難い子など、親や学校との連携と同時に、児童館として最も有効な働きかけは何かを問われる段階を迎えてもいた。10時から5時の開館時間の中で、しかも総スペースに占める年少者の時間と空間と人数の大きさ多さの中で、ある時は共に、ある時は棲み分けながら、中高生の主体的参加の場、活動の場を生み出すには、少し無理がある。量を気にせず居られる空間、思春期からあまり遠ざかっていない若者との出会いがある場を準備する、その為に必要な開館時間の延長を行うことから児童館が年長児童の居場所として機能する道が開けるのではないだろうか。

### ●♡ふらっと♡USERS♡

こうした結論に至る過程で、先述した青年ボランティア団体との巡り合いがあった。不登校児童やひきこもりへの関わりをイベントを通して行い、NPO法人を日指しながら活動実績を積み上げてきた青年ボランティア団体「ふらっと」である。彼らの不登校児童への支援活動は、児童館の年長児童に対する活動に大切な視点を示唆していると思われ、彼らとの連携は、児童館事業の機能

強化に繋がる可能性を孕んでいると思われた。しかも不登校児童の増加傾向は、子どもの自立支援や子育て家庭支援という児童館の役割・機能からみて今後の事業展開に重要な位置を占めると考えられる。青年を中心とする意欲的人材が育っている『ふらっと』にとっても、公益事業としてある地域に密着した児童館との連携は、組織としての社会的信用と認知度を高めることに繋がる。更には、不登校やひきこもりといった社会との接点において課題を持つ子ども達と『ふらっと』スタッフが、学校という場を介さずとも同年齢の子ども達との出会いがある場をもてる事は、これまでの「ふらっと」の活動領域を広げ活動内容の深まりを生むであろう。児童館にとっても、青年ボランティア団体にとっても大きなメリットを認め合える出合いである。

### 3. プレステ2がやってきた!

今までの様に、児童館が事業を計画して、実施の段階で「ボランティアさん」としてお手伝いに来てもらう、のではなく、企画段階から彼ら「スタッフ」と共に一休どんな事業をしようか?というところから頭をひねる。一緒に話し合い、アイデアを出し合った。その結果、多様なプログラムのアイデアや、発想、実施にあたっての準備や当日の雰囲気作りなど、決して職員だけではできない事が実現することに。

「どうしたら中高生が児童館に集まってくるのだろうか?」



▲夏祭り「中学生のゲームコーナー」うけつけ嬢

「小学生だけでなく、中学生にとっても居心地のいい場所にするには、どうしたらいいのだろう？」

まずは、スタッフも感じている「小学生までの施設」というイメージを払拭し、中高生達に、自分たちも利用できるんだ、楽しめるんだと感じてもらわなければならない。その為に月一回のイベントという形で試験的に事業を実施する事にした。実施の為に必要な条件は3つの事にまとめられる。

① 中高生と垣根を越えて付き合えるスタッフの確保

② 利用しやすい開館時間の設定

③ プログラムを展開するためのアイデアと設備

どんなにすばらしい職員が1人がんばっても、若いボランティア10人が作り出す雰囲気は、かなわない。また、部活や習い事で忙しい中高生にとって、5時に閉館という条件では難しい。はつきりと小学生向けのプログラムとの違いを強調する意味も込めて5・30から8・30という時間を設定し、この企画を「ヨルのジドウカン」と名付けることになった。

「中学生の時、毎日何してたっけ？」「ゲーム、ゲーム。友達とよくやってたし、今でもおもしろいよん」「大画面でみんなとやったら絶対、面白いで！」

「女の子は？」「うーん、こたつでテレビ見た。」

でも友達とお菓子作ったりとかはいつもやりたかったな。あとは、マンガ読んだり、マフラー編んだり、音楽聴いたり……」

そんな話の中で、「プレステ2」を購入し、ビデオプロジェクトと接続、超大画面のスクリーンに映し、ゲームセンターに負けないぐらいの環境でゲームをする事と、落ち着いて楽しめるものとして、お菓子作り、編み物などを用意する事にした。また、活動が定着する頃には、みんなで鍋を囲もうーということになった。図書室の本は小学生までのものがほとんどなので、マンガをたくさん入れた。

小学生に向けた活動がメインで、彼らはそのジュニアリーダーとして育成を……という見方ではなく、本当に彼ら、彼女らに向けた活動であり、まずは自分達がやりたい事を楽しんだらいい。目標は、そこが、遊んだり、くつろいだり、おしゃべりしたりと、自分のペースでできて、居心地のいい場所である事。中高生に限らず、12歳ぐらいから18歳までの人なら誰でも来れるという事。

#### 4. タマリバと居場所

準備が進み、広報する段階になって、中高生を取り巻くいくつかの「現実の壁」を肌で感じる事もあった。

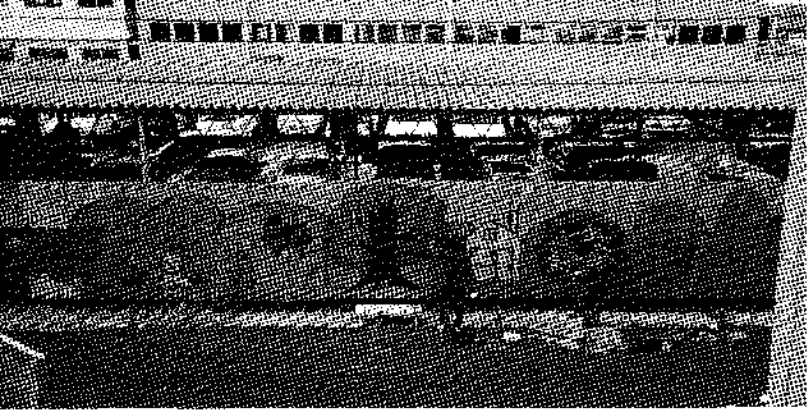
周辺地域では、少年の非行がかなり問題になっている。深夜の暴走行為、喫煙、コンビニや公園でたまり、ゴミを散らかす……。彼らのことは、以前から知っており、よく喋ったりもしていた、

見かけはかなり「イカツイ」が、仲良くなるやたらと話し掛けてくる。「俺らが公園にいるだけで、警察呼ばれるねん。なんも悪い事してないのに」と、彼らは彼らなりに主張する。何も悪い事をしていない事はないのだが、彼らが学校以外の場でも居場所や人間関係を求めている事は感じられる。

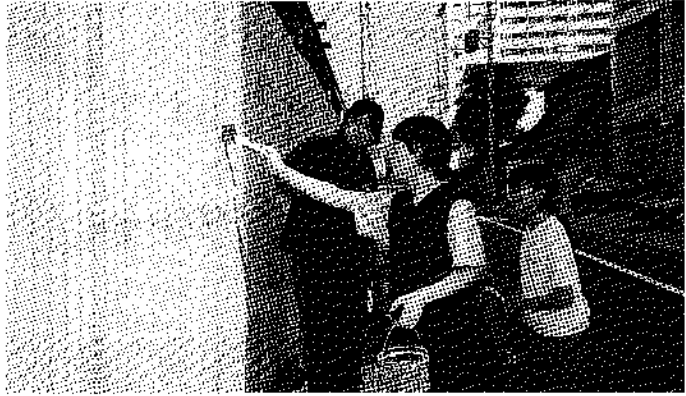
しかし、悪い事や、迷惑をかけている事も事実であり、いつもは「この地域の子どものことやら」と児童館に協力してくださる近所のおじさんも、中高生の話をすると「あいつらは何や……」となる。「彼らもこの地域の子どもですから……」と言っても、すぐには受け入れられない。彼らの行動を見ていると当然かもしれないが、彼らについてだけでなく、一般的に中高生を見る周囲の大人の目はきびしいと感じた。中高生向けのプログラムを、地域の方々に理解してもらうのに、小学生のそれとは違って、時間と努力が必要なことを実感した。

この企画のことで、中学校の校長先生と話しをさせてもらった時も、彼らの話に終始し、「それでも大丈夫なのか」と聞かれたが、児童館としての最低限のルールを設け、それに反しないかぎり受け入れる意思と、覚悟はあることを伝えると、理解して頂いた。

確かに、彼らがここで問題を起こしたり、雰囲気を壊したりしないかという不安はあった。しかし、そんなことを恐れて頭から彼らを締め出すような事では、この居場所作りのプログラムは嘘になる。いわゆる「いい子ちゃん」が児童館に来て、



◀白壁のペイント!!



◀ペンキでベタベタ。アーティストの気分

そうでない子どもが外にいて……というのではなく、いわゆる「ヤンキー」であつても来るもの拒まず、学校に行っている人も、行っていない人も、そんなことには関係なく、誰でも来れて、誰でも楽しめる場所に。

### 5. ペイントする??

さまざまな反応があつたものの、ともかく「ヨルのジドウカン」事業がスタートし、冒頭に書いたような雰囲気、実は職員もスタッフもかなり楽しんでる。さらにこの事業の中からもう一つ、面白い企画が飛び出した。それは「児童館の前の

壁にペンキでペイントする」というもの。児童館の向かいに工場の古びたトタンの壁がある。前から「ここにペイントするのってかっこいいかも?」と思つていたところで、この際にやっちゃえ!と交渉し、描いてもいい事になった。なんだか「アメリカの下町っぽい」この企画には中高生が

のつてくるはずで、毎週土曜日の昼間にみんなで描くことにした。これがなかなか面白く、あまりできない体験でもあるので、スタッフの方が楽しみ過ぎてしまうほどであつた。高さ3m、長さ40mもの壁すべてにみんなでペンキまみれになりながら描いた。描く過程の楽しさもさることながら、巨大な素晴らしい作品が出来上がり、今では併設する老人ホームのお年寄りを始め、道行くいろんな人にも喜ばれている。はじめは思いつきで気軽に始めたのだが、参加した中高生もスタッフも、十分に楽しみ、そして結果として周りの人に喜ばれ、中高生の活動のことを積極的にPRでき、理想の形になった。

### 6. 誰かがいる場所

以上の様に、実践としては始まったところではあるが、児童館が中高生にとつても、徐々に居心地のいい場所になってきているという手ごたえを感じる。

なせ、イベントの日には閉館の8:30になつてもみんな帰らない。夜なのでこちらは心配して声かけをするが、なかなか帰らない。それほど楽しい理由はやはりスタッフにあり、近所のお兄さん

お姉さんのスタッフの存在は大きい。その事を改めて感じる。重要なのは、どんな設備かよりもそこに行けば「誰かがいる」ことだと。たくさん若いスタッフが核となり、たくさんのお出合いが生まれ、人間関係が感じられる場所。

僕は、家庭や学校以外で、人と出合い、人間関係が築ける居場所をつくる事は意義のある事だと確信している。

例えば、多くの人がそうであり僕もそうだったが、中学時代の自分にとって、人と出合い、友達をつくる場所はほとんど学校だけであつた。多くの人が、学校でしか友達をつくったり人間関係を作る事ができない社会なのであれば、学校に行かなければ、友達も失ってしまうことになる。学校を否定しないが、それほど学校の存在は大きい。

しかし、地域にある学校以外の場所で、誰かがいて、ふらつとよれる場所。

そんな場所としての児童館は、不登校をめぐる困惑の中でも、ポイントになりうるものだと考える。そこで、1月には「不登校」をテーマとしたシンポジウムを開催する。その中で、親、本人、教師、カウンセラー、大学教授など、不登校に関わる様々な立場の人によるディスカッションをしてもらい、これから何が必要なのか、児童館には居場所としてどのような可能性があるのか、などを考えるきっかけにしたいと思う。本事業の縮めくりはそのシンポジウムである。2月以降の活動については、白紙である。一度そこでふりかえりをしようと思う。しかし、それは必ずや新たなスタートとなるだろう。